

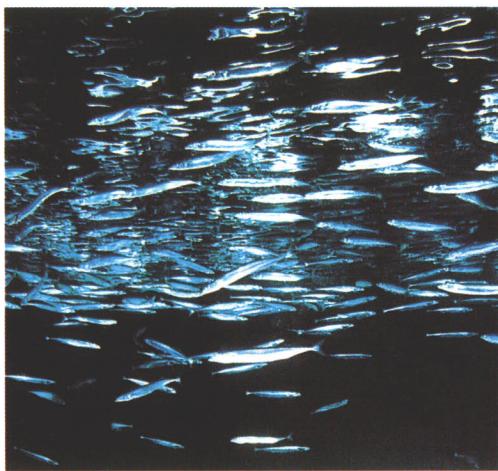
サンマ飼育水槽はこれまで円形のもの、を使用し、強い水流をつけっていましたが、展示水槽は四角形をしていて、水流の強さもポンプの問題から限度があります。

そこで濾過槽からの循環水配管に手を加え、水中で一定方向に向かって吹き出す

ようにしました。また数日後に行方不明の水槽準備ができたところで、いよいよ展示水槽での試験飼育開始です。飼育困

難生物実験施設から展示水槽へのサンマ輸送は、エサでおびき寄せてビニール袋にすくい取り、酸素パックにして運ぶことにしました。

五月下旬、三〇尾のサンマを展示水槽に搬入しました。サンマの動きを見ると、ガラス面の人間に對しては怯えないことがわかりました。しかし、観覧通路にある解説パネル照明近くに人が通ると一斉に反応します。やはり人間の姿が見えると落ち着かないようです。またガラスをたたくと反応するものがいます。そこで解説照明下でガラス面に柵を設置すること



▲展示水槽の4,5世代目のサンマ
School of Pacific Saury of 5th generation in a exhibit tank

とにしました。また数日後に行方不明のサンマがいることが確認されたため、徹底的に調査してみると、小さなすき間から飛び出して、循環水とともに濾過槽に落ちていることがわかりました。急いで細かい目のネットを取り付けましたが、予想外のことが次々とおこりました。

展示成功

試験飼育終了後、三週間かけてサンマを徐々に増やし、六月下旬には三〇〇尾のサンマを展示水槽に搬入しました。サンマの群れの動きが安定せず、その原因がわからなかったため一喜一憂することもありませんでしたが、無事七月十五日の開館時に四世代目のサンマを展示することができました。

水槽の前では、テレビや新聞の報道から「サンマは飼育が難しくて、これが世界で初めての展示なんだって」とか、「サンマの泳ぎ方って、こんなだったの」と驚く声を聞くことができ、これまでの苦労を忘れさせてくれました。

サンマ展示の意義

サンマは誰もが知っている大衆魚ですが、これまで水族館では展示されませんでした。サンマは飼育が難しいから展示できなかつたということも事実ですが、今まで水族館はどうやらかというと珍しいものや色鮮やかなものなど話題性を重視してきたからともいえます。しかし、日本人にとって貴重なタンパク源である水産物を、珍しくないから水族館で研究したり展示しても意味がないと考えること

もう少し研究しなくては答えはできませんが、飼育すればするほど新しい疑問が出てくるのです。

サンマ飼育を振り返って



▲サンマの水揚げ(小名浜港)
Haul of Pacific Saury (at Onahama port)

水族館の開館準備をする際は、水槽を作つて水を張り、魚を購入すれば完成すると考える人がいます。しかし敢えて私たちは開館三年以上も前から、サンマを展示することにエネルギーを注いできました。世界で初めての前例のないことには、自然の恵みである水産生物を将来にわたつて利用し続けるには、どのように環境問題を考えなくてはならないのかを、わかりやすく解説したり警告する必要があります。

サンマ展示の成功は、珍奇な生物の話題だけを追い求める施設から、身近な生物で新しい発見ができる施設を目指す当館の姿勢を示すのに一役買いました。

山吹き色の尾ビレをもつサンマ

サンマの繁殖を観察していた時の事です。産卵床に近づくサンマの中に尾ビレの付け根付近が鮮やかな山吹き色に変化している個体を見つけました。繁殖行動をしている全てが変化しているわけではありません。オスまたはメスのどちらに現れるものなのか、さつそく捕まえて調べてみると、オスにもメスも現れる事がわかりました。更に観察を続けると、これは繁殖行動が盛ん時にだけ現れて、ピークが終わると再び元の色に戻ること

がわかりました。

なぜこのような変化が特定の個体に現れるのか、どのようなサインなのかは、